

# ふたばっ子とともに

R4. 11. 11

10/14の「校長通信」で紹介した「心のスイッチ」。

それにかかわることで、子供たちにとって、また新たな「学び」の機会が生まれたので、そのことをお伝えします。

## 「失敗」して学ぶ

10月の中旬ごろに、9/30(金)の朝会で紹介した「さわれる『心のスイッチ』」の模型を昇降口に展示しました。

その後、「心のスイッチ」に触れながら、子供たちは、それぞれに様々なことを考えているのが分かりました。

登校して教室に向かいながら、軽くポンッと「心のスイッチ」を押して、さっそうと歩いていく子。

休み時間の教室移動中に、友達に「ちょっと待ってて！」と告げ「心のスイッチ」の前に駆け寄り、「とりあえず、On!」と自分の気持ちを確かめるように声を出しながらスイッチを押して、嬉しそうに友達のところに帰っていく子。

数人でスイッチの周りに集まって、いろいろと会話を交わしながらスイッチを「On」にしたり「Off」にしたりして楽しんでいる子たち。

もうすぐ授業が始まりそうな時に、スイッチの所へ駆け寄って「On」になっているのを確かめてから、友達に「よし、大丈夫」と語りかける子。

下校の時、「一日の学校生活の締めくくりに…」という感じで、優しくスイッチを「Off」にしてから満足そうに昇降口に向かう子、などなど…。

実は、前任校でも同様の模型を、廃材の段ボールを利用して作りました。その時は、どちらかというと「見せるため」に作った模型だったので、たくさんの子供たちが触れることに耐えきれず、すぐに壊れてしまいました。それを見付けた私は、「簡単に作ったからな・・・」と思いながら直して、また昇降口に置きました。その後も、「壊れて直して」を3回繰り返し、その年の展示は終わりました。(もちろん、その時も、子供たちには大きな学びがありました。)



初代「さわれる『心のスイッチ』」

前任校において、子供たちにとって、「さわれる『心のスイッチ』」を展示する効果や意義が大きいことを感じた私は、次年度、さわっても壊れることなく、子供たちの「押してみたい」の思いに耐えられる模型にしようと、木材や金具を用いて「心のスイッチⅡ」を完成させました。(奇しくも、コロナ禍の始まり、年度初めから全国一斉休校となった令和2年度の1学期でした)今回、紹介し展示したのは、それです。

「スイッチを押してみよう」という子は、双葉小でもたくさんいました。

大勢の子が毎日触れていれば、当然、金具が緩んで本来の動きや感触ではなくなってきました。ただ、そうした金具の調整を定期的にする中で、「明らかに、ふれ方や扱い方が間違っている子がいる」ために、内部の部品が外れたり、剥がれたりという状態が起きるようになりました。

そこで、この展示を終了するか、継続しようかどうかにについて考えたのですが、冒頭で紹介したように、この模型を通して様々な事を考えたり、感じたりしている子たちが大勢います。そうした子供たちのためにも、きちんと直して続けて展示してあげたいと思いました。

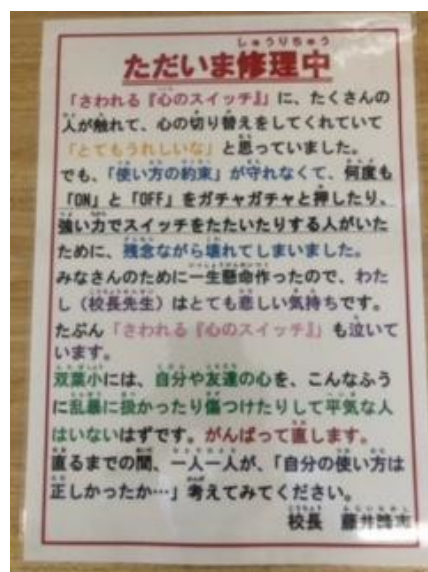
そして「さわれる『心のスイッチ』」の修理期間中、右のメッセージを模型の代わりに提示して、みんなで使うものの扱い方について考える機会にしようと思いました。

もちろん、この言葉は、全校児童に向けたものではありません。しっかりと考えて使える子が大半です。ただ、中には、壊そうと思っていたわけではないけれども、「壊してはいけない」「どうやって触ればよいか」ということを想像できない子がいたので、その子供たちに向けて投げ掛けてみたのです。

おそらく思いがけず壊してしまった子は、「ああ、失敗した」と思っていたことでしょう。だからこそ、この経験を生かして、次につなげてほしいと思いました。

それは、きっと自分たちの身の回りに数多くある「公共物」の扱い方へと生かされていくのではないかと考えています。「みんなの物だから」「次に使う人がいるから」、そうした少しの気遣いをしながら「公共物」を使える人になっていってくれることを願います。

また、今回のような「失敗」は、次に一歩踏み出すための大きな力となります。だからこそ、子供たちにとって「失敗」は、必要不可欠なものだと思います。したがって「失敗」を「失敗だ」と自覚させなかったり、前もって「失敗すること」「失敗しそうなこと」自体を取り除いてしまったりしたら、子供たちの学びは、浅く狭いものになってしまう可能性があります。



ただいま 修理中

「失敗」したら、「なぜ失敗したのか」「何がいけなかったのか」を考える。その考えを元に、次の行動を起こす。その繰り返しが、正しい行動へ、自信を持った一歩へ、自らを導くことにつながっていくのだと思います。

今回の「失敗」は、頑丈に作り直した模型でも、「たぶんこんな部分が、こんなふうには壊れるかなあ」と、あらかじめ想定できるものでした。そういう「起きるだろう失敗」を、私たち大人が用意してあげることができたならば、子供たちはさらに大きくたくましく成長していくのではないかと考えます。

もちろん、自分や周りの人たちの命に関わる（事故やけがにつながる）ような「してはいけない失敗」は、きちんと注意する必要があります。

でも、「してもよい失敗」ならば、子供自身がしっかりと自分や出来事と向き合い、様々な事を考える機会として生かすことができるのではないのでしょうか。

子供たちが「失敗」して学びべるように。

職員一同、できるだけ視野を広げ、受け皿を大きくして、今後も子供たちと向き合っていきたいと思います。



「さわれる『心のスイッチ』Ⅱ」